

仏足石

この石は、仏の足跡の彫刻が彫られており、この足跡は初期仏教に見られた偶像です。今日では仏像や仏画に祈るのが一般的だが、仏の涅槃後数百年の間、信者がそうすることは考えられていませんでした。当時、仏教は仏の教えを研究するための規律であり、彼の聖なる存在は形を与えられるべきではないという慣習がありました。代わりに、仏陀の足跡の石の彫刻が作られました。これは、彼が地上を歩いた場所を示し、彼が実在していたことを思い出させるためのものでした。薬師寺の石の碑文によると、これらの足跡は現在の中国・西安の寺院にあるものの模様に写したものであり、さらに中国のものは、ブッダが人生の大半を過ごした場所と言われている古代インド王国のマガダに祀られているものの模様に写したものだといいます。また、作成して奈良に持ち込んだのは、中国の唐王朝（618～907）の日本使節団の黄文本実だということも明らかにしています。薬師寺の創始者である天武天皇の孫である文屋真人智努（693-770）の要請で、彼の亡夫人である茨田郡王の記念碑として石に刻まれました。753年と記されており、日本で見る約300個の類似の石の中で最も古いものです。碑文によると、これらの足跡は、彼がニルヴァナに足を踏み入れたときに仏が踏んだ場所のものであり、仏の吉兆についての彫刻が含まれています。さらに、それを見ただけで信者の罪を洗い流す力があると信じられていました。